草津東高等学校読書活動推進事業「本derful!」～10分間読書、一斉読書、課題読書、本derful!講演会など 読書を通じ、可能性を広げます～

ぺえじ

草津東高等学校図書館
本derful!委員 発行
2024年6月号 No.2
学校ホームページ版

＜草東祭☆図書委員会企画のお知らせ＞

【企画その①「図書委員会おすすめ本展示」】

図書担当委員＆本derful!委員がこの1年間におすすめしてきた本を、紹介文と共に展示します。貸出も可能😄

【企画その②「オリジナルしおり作り」】

しおりを手作りしてみませんか？材料は図書委員会で用意するので、手ぶらで来てくださいね

場所：**3階図書館**（文化の部自由鑑賞時間）

＜「草津市立図書館高校連携交流会」のご案内＞

草津市立図書館本館で
書庫ツアー＆ミニ司書体験に
参加しませんか？

7月17日（水）
14:00～16:00
＊この日は午前授業日

◎草津市内にある高校の生徒だけが参加できます。
◎普段見られない書庫に入れる！
◎他校の生徒とも交流できる！
◎現地には草津東高校の職員も待機☺
◎昇降口や３階図書館に案内プリントがあります。

申込フォームのQRコードは、配付版「ぺえじ」に記載しています（昇降口や図書館前にも掲示あり）

申込締切 7月1日（月）

本ｄｅｒｆｕｌ！委員のおすすめ本～３年３組、３年４組担当～

『交換ウソ日記』

櫻いいよ：著　B913.6サ
スターツ出版
（スターツ出版文庫）

<あらすじ>

ある日、いたって普通の高校生の希美は、「好きだ」の3文字が書かれたラブレターを見つける。ラブレター差出人は、容姿端麗で成績優秀な瀬戸山くんであったが、そのラブレターは希美の友人の江里乃に宛てられたものだった。

<感想やおすすめポイント>

希美は、江里乃になりすまして、タイトル通り瀬戸山くんとウソの交換日記をすることになります。希美の交換日記のウソはどうなるのか、希美の恋はどうなるのか、という読んでいけばいくほど続きが気になってたまらない本です。

『ノーゲーム・ノーライフ 1』

榎宮祐：著　B913.6カ
KADOKAWA
（MF文庫J）

<あらすじ>

空と白は２人で１人の引きこもり天才ゲーマー兄妹。そんな2人はある日、全てがゲームで決まる異世界「ディスボード」に召喚されてしまう。そして、窮地に立たされた人類を、持ち前の天才的な頭脳で救っていく。

<感想やおすすめポイント>

空と白は、エルフや天使や獣人といった、様々な種族にゲームを挑んでいきます。ピンチを予想外の戦略で切り抜け、勝てるかと思いきやまたピンチに……先の読めない頭脳戦と、空白の快進撃は唯一無二です。

『麦本三歩の好きなもの 第一集』

住野よる：著　B913.6ス
幻冬舎（幻冬舎文庫）

<あらすじ>

好きなものがたくさんあるから毎日は楽しさで溢れている。

「麦本三歩には好きなものがたくさんある。歩くこと。寝坊すること。本を読むこと。食べること。」

そんな麦本三歩のなにげない日々を描いた心温まる日常小説。

<感想やおすすめポイント>

麦本三歩という人物が、普段のなにげない日常の中でのちょっとした嬉しいことや新しい発見を素直に表現していて心温まる作品です。大したことは起こらなくても、私たちの日常には幸せが溢れていることに気づかされ、きっとあなたの心も明るく照らしてくれること間違いなしです！

『あやかし夫婦は今世こそ幸せになりたい。浅草鬼嫁日記』

友麻碧：著　B913.6ト
KADOKAWA（富士見Ｌ文庫）

<あらすじ>

浅草に住む女子高生の茨木真紀と、その幼馴染の天酒馨。彼らには秘密があった。それは、前世が茨木童子と酒呑童子という平安の大妖怪であったことだ。人となった今世も二人はあやかしと共に生きていくこととなる。

<感想やおすすめポイント>

この二人は元夫婦でしたが、妖怪であった前世では報われないまま殺されました。平安時代から平成へと転生した彼らは今世もあやかしや人間関係で苦労していくことになります。それでも、仲良し夫婦手を取り合って問題を解決していく姿に感動間違いなしです。

今年度のリクエストマンガ、
22タイトルより
新規購入シリーズ決定！がめ

図書委員会投票 第1位

アニメのファン多数！原作が気になる作品

『銀魂 ―ぎんたま―』 全77巻

空知英秋：著 集英社

投票コメントより

→・何よりもギャグがものすごーーーーーーーーく面白い！それに、他作品のパロディが多く漫画&アニメ好きにとっては楽しめる作品だから。また、ふざけつつもストーリーはしっかりとしていて面白い。/・笑って泣ける最高のSF人情なんちゃって時代劇コメディー！有名なアニメや芸能人のパロディやギャグがとても面白い。特に将軍が登場する話は「将軍回」と呼ばれてとても人気が高く、爆笑必至です！実在する歴史上の人物をモデルにしたキャラクター(例えば、坂本龍馬は銀魂では坂本辰馬)も多いので、歴史の勉強になるかも…。私が1番好きな漫画なので是非図書室にも置いて欲しいです。/・ギャグ漫画みたいに不可能なことができるところがぶっ飛んでいて面白いです。/・友達の熱い要望/・努力！友情！勝利！ジャンプの王道要素を兼ね備えつつ、意外性のあるストーリーでテンポもはやく、70巻以上もあるのに飽きが全然来ません！キャラクターたちの人情味ある行動に大人でも感動して思わず泣いてしまいます😭各章は現実世界でも役に立つような教訓で締めくくられ、生徒の情緒を育むのにも役に立ちます。エピソードの合間に挟まるギャグも思わず笑ってしまうほど面白いです。他の人に『読んでほしい』という思いで言えば銀魂はNARUTO以上です！

図書委員会投票 第2位

魔王討伐後の勇者たち

『葬送のフリーレン』 1～13巻

山田鐘人：原作

アベツカサ：作画 小学館

投票コメントより→・アニメ化され、キャラクターも可愛く漫画を見てみたい！/・アニメ見てどハマりしたので是非漫画も読みたいです！！/・最近人気があるから。/・ 異世界系でありながら戦闘描写が多かったり登場人物がバタバタと倒れていったりするのではなく、ほのぼのとした、比較的に平穏な旅が描かれており、魔法も戦いに向いたものだけでなく「汗を咲かせる魔法」などといった日常的に使える魔法などもあり個性があって面白い。また、話の展開は早く変わっていくがその話ごとの間は何日、何ヶ月、時に何年と経っていることもあり、フリーレンがエルフであり人との時間の持ちようが違うのだと感じられ面白いから。

図書委員会投票 第3位

アニメ（＆主題歌）も話題の魔法学園もの

『マッシュル ―MASHLE―』 全18巻

甲本一：著 集英社

投票コメントより

→・マッシュルームカットにマッスルでマッシュルなのかなと勝手に思っていて。安直で愛おしいなって思ってます/・毎週ジャンプ買って最初に読むほどおもろいです/・前々から気になっていましたが、読めていないので、読んでみたいです!/ ・アニメ一気見しました

学園日常系ジャンルより

『ぼっち・ざ・ろっく！』 VOLUME1～6

はまじあき：著 芳文社

投票コメントより→・軽音楽部に入ったのもあり一度読んでみたい！/バンドで青春、高校生の私たちにも共感できそうな漫画なので、読んでみたいです。/・みんな頑張っている/・軽音楽部だから/・テレビで見て気になっています！

教科関連ジャンルより

『チ。 －地球の運動について－』 第1集～第8集

魚豊：著 小学館

投票コメントより→・理系とか宇宙が好きな人とかは絶対ハマると思います!/ ・推しが読んでみてほしいと言っていたため/・テーマが気になるので読んでみたいです。

教職員「本読みトーク」 Part 156

『ちいさい言語学者の冒険 子どもに学ぶことばの秘密』

801．0ヒ

広瀬友紀：著
岩波書店

息子がまだ5歳頃のこと。

「ぶーぶー」「わんわん」などの赤ちゃん言葉は卒業しながらも、「とうもころし」「♪ジングルベ～ル ジングルベ～ル 鈴な～がる」「あっ、ひまわりさん！（おまわりさんね）」などの言い間違いを頻発していた。母親として、というより一国語教員として、この時期限定の言い間違い表現が面白く、忘れないように日々メモをとっていた。こんな言葉もメモをした。「ムシさん、死む？」

そして、ある日見つけたのがこの本、『ちいさい言語学者の冒険』である。この本を手にし、買おうと思ったのは、表紙に「これ食べたら、死む？」と書かれていたからだ。驚いた。「とうもころし」が『となりのトトロ』のメイちゃんをはじめ、多くの子どもが口にする、あるある表現であるように、「死む」も普遍的な言い間違い表現なのか。だとしたら、なぜ子どもたちはこのような言い間違いをするのか。

そのような疑問に、この本は丁寧に答えてくれた。この時期の子どもがよく耳にする表現「読んだ」「飲んだ」「噛んだ」などは、すべて「読む」「飲む」「噛む」という語の活用形である。「読んだ」が「読む」なら、「死んだ」も同じであるに違いない。つまり「死む」だ。子どもが共通して口にする「死む」は単なる言い間違いではなく、5 歳児の高度な類推の結果導き出された規則を適用した表現なのだ。なんと！確かに、よく考えてみれば、「死ぬ」は、古典ではナ行変格活用の動詞であり、現代語でも唯一のナ行五段活用の動詞である。圧倒的に「マ行五段活用」の動詞の方が多い。つまり「死ぬ」の方が特殊な言い方なのだ。全く知識もないところから、一つの言語を習得するという途方もない作業の過程は、まさに子どもにとって「冒険」であると思わされた。この本には他にも様々な「冒険譚」が紹介される。身近なところにある小さな引っかかりから広がる世界の深さに感動する。

さて、ここで気になるのが、なぜナ行活用の動詞は「死ぬ」一語なのかということだ。残念ながらこの本はその問いには答えてくれない。私は、発音の容易さに関わるのではないかと思うのだが、どうだろう。この疑問については、恐らくネットで検索すればすぐに誰かの答えにたどりつくだろう。しかし、あえてしない。引っかかりは引っかかりのまま残しておきたい。そして、またいつかどこかでそれについて答えてくれる一冊に出会えることを期待する。予想もしない偶然の出会いも、読書の醍醐味の一つなのだから。